

研究

RESEARCH

ライネツケ・シュミルデ氏 講演報告 「音楽における生涯学習」

国立音楽大学理事
久保田 慶一

はじめに

平成25年11月、東京で、ライネツケ・シュミルデ氏の講演会が行われた。講演の題目は「音楽における生涯教育」でした。以下、シュミルデ氏の講演内容を要約し、私なりのコメントを追加しておきたいと思います。

シュミルデ氏はオランダの出身で、現在はグローニンゲンにあるプリンスタウス音楽院でリサーチグループを立ち上げ、教師や国際的な研究者と共に、音楽の生涯教育について研究しておられます。このリサーチグループの研究

内容は、彼女の言葉を借りれば、「音楽家の成長・発達に貢献すること、つまり、音楽家に学びの力、知的好奇心、起業家精神をもたらす、社会とのつながりを助長することにあると言います。

特に、彼女たちは、音楽家のさまざまな役割について考えていますが、そのなかでも、リーダーとして成長することを、音楽家の人間的・芸術的・専門的な成長と位置付けて、調査・研究されています。そしてこの成長過程においてこそ重要なポイントは、音楽家にとって常に新しいことを実践していくことの意味を考え、人々の

多様な文化的・社会的背景を理解し、それらに向き合った上で、いかにして新しいタイプの聴衆を獲得するかということですが（以下、講演の要約です）。

音楽家に必要な能力とは

今回は、世界的規模で関心が寄せられている問題、「今日のプロフェッショナルな音楽家には何が必要なのか」という問題について、ヨーロッパ側からの視点から考えてみたいと思います。また私が所属する音楽生涯教育センターがこの課題に対して、どのような活動を行っているのかについて、ご報告したいと思います。

今日、世界はものすごい速さで変化していますし、その変化は音楽を職業とする人々にも大きな影響を与えています。これは全世界共通の問題です。

ヨーロッパにおける音楽家の職業事情はどうかといいますと、「オーケストラで演奏する」といった伝統的「音楽を教える」といった伝統的

な仕事を除けば、音楽家は様々な形と役割をもって活動するという傾向にあります。

つまり、一生涯ひとつの職に就き続けるのではなく、フレキシブルに職のパターンを変えながら働くということですが。どこかの団体に属するよりも、フリーランスとして働く音楽家が増えています。だから音楽家自身が「起業家精神」を持つことも必要になってきます。

今日の音楽家には、様々な場所（例えば、病院、企業、老人ホーム、刑務所、学校の教育プロジェクトなど）で、異なる分野の人々と関わりを持つことが求められています。

これは大変なことですが、新しいタイプの職業を生み出す絶好の機会もあるのです。プロの音楽家として様々なニーズに答えつつ活動をしていくのは、決して簡単なことではありません。音楽的才能と技術を持っているだけでは、今や十分ではないのです。

音楽家に必要なのは、自分自身をマネージメントする力、今持っている技術を違う形に変容させ伝えるスキルと決断力、そしてビジネス力です。

音楽家のポートフォリオ・キャリア

ヨーロッパでは、複数の職業活

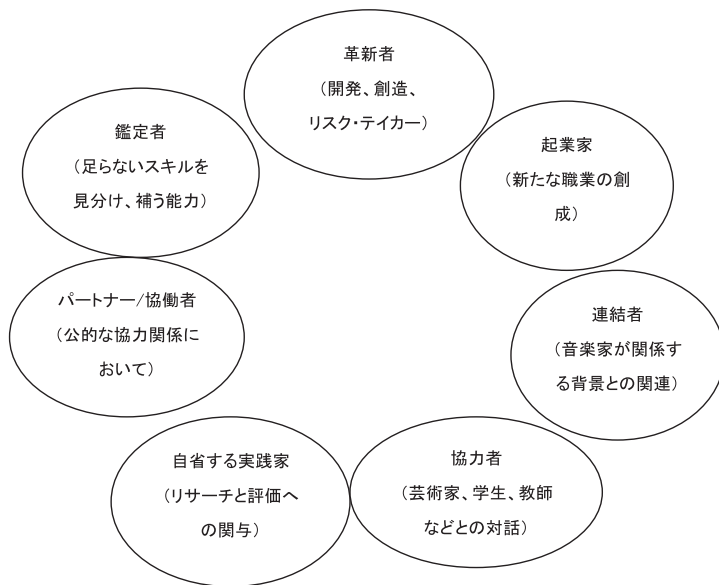


図 音楽家のポートフォリオ・キャリア

動を行う音楽家が急増しています。このような職業活動を私は「ポートフォリオ・キャリア」と呼んでいます。

一番わかりやすいポートフォリオ・キャリアの例は、演奏家であり教育者であるという場合でしょう。そしてこのポートフォリオ・

キャリアを維持するには、様々な状況に応じて複数の役割を同時にこなせるという「マルチな能力」が必要となります。そしてそれぞれの役割は相互に関係しあっています。

2002年イギリスで、「音楽の場を創り出す」と題された、イギリスの音楽家の職業形態の変遷に関するレポートが発表されました。それによると、音楽家には実に50以上の役割とスキルが確認されたそうです。それらは主に次の4つに分類できます。つまり、作曲家、演奏家、リーダー、教師の4つの役割です。

これらの役割は重なっていたり、複数のジャンルにまたがっています。作曲家は曲を書いたりオーケストレーションや編曲をしたりしますが、その場合、空想家、革新家、リスク・テイカー、冒険家という側面を持ち合わせています。

演奏家であれば、歌ったり楽器を演奏したりすると同時に、即

興するという作曲家の要素や、バンドを率いることでリーダーの要素を合わせ持っています。

生涯学習者としての音楽家

今日の音楽家はカメレオンでなければなりません。要するに、「変わり続ける文化に、いかに柔軟になじむことができるか」を、音楽家として模索することが必要となります。

ここでは、生涯学習という考え方が答えを見つけるヒントとなります。というのも、生涯学習は、「連続する変化によって生まれるニーズに対応したダイナミックな考え」だからです。

生涯学習は、常に形を変えながら、柔軟に物事に対応する能力を、私たちに授けてくれるのです。

生涯学習とは、人生全体を通じて「経験を知識、スキル、態度、価値観、感情、信念、感覚へと変容させる」プロセスだと言えます。

ですから、生涯学習は、すべての知識、技術、態度を含め、大学な

どの高等教育の枠組みをも超えた
ものです。

単に「習い続ける」ということ
ではなく、新しい学びの形を新し
い方法論でもって問いかけ続ける
ことが、重要なのです。

生涯学習という考え方の特徴の
ひとつが、学校以外の場における
学習であるということが挙げられ
ます。学習には、公式学習、非公
式学習、私的学習という、3つの
異なるアプローチがあります。

公式学習とは、音楽大学など決
められたカリキュラムの中で、音
楽を職業とすることを踏まえて技
術や知識を修得することです。こ
こでは、主にディプロマや証書、
資格などの取得が目的となってい
ます。

非公式学習とは、学校など既存
のシステムの外で学ぶこと、例え
ば、オーケストラでのインターン
シップなどが例に挙げられます。

私的学習は、教師が介在しない
場で音楽家どうしが関わりあいな
がら、ほぼ無意識のうちに学ぶこ

とです。ポップス系のミュージシ
ヤンが自宅のガレージに集まって
練習しているうちに何かを学び取
るというような場合です。そして
生涯学習では、これら3つの学習
法を関連づけることが重要となり
ます。

コミュニティ音楽家

ポートフォリオ・キャリアを实
践している音楽家に見られる特徴
は、コミュニティ音楽家が増加し
ていることです。特にイギリス、
北欧、オランダではここ10年の間
に顕著に見られる傾向で、業種の
幅も広がっています。

コミュニティ音楽家は、例えば
医療施設、社会福祉施設、刑務所
といった場所で、「創造的な音楽ワ
ークショップ」を提供しています。
このようなワークショップでは、
集団での即興演奏などを通して、
参加者の表現意欲を引出すとい
う、参加型学習が行われています。

このような試みを見ています
と、今日の職業的音楽家にとって

「環境とのつながり」がいかに重
要であるかがわかります。音楽家
が新しいタイプの聴衆を開拓した
いのであれば、変化し続ける社会
に敏感に反応しなくてはなりません
が、優れたコミュニティ音楽家
はこれをうまく成し遂げていま
す。つまり、聴衆をうまく「読ん
で」いるわけです。

コミュニティ音楽家の例が示す
ように、今日の音楽家は多様な文
化に反応すること、また演奏家、
作曲家、教師、助言者、コーチ、
リーダーなど、多くの役割をこな
すことが求められています。革新
的であり、自省的であり、そして
応用力や協調性をもっている、そ
して起業家的であるということ、
これが「生涯学習者」という姿な
のです。では、どうすればそれが
達成できるのでしょうか？

コミュニティ音楽家のリーダーシ ップ

環境とつながるコミュニティ音
楽家の一例として、創造的ワーク

ショップのリーダー、シヨーン・
グレゴリー氏についてお話ししま
す。

彼は、多様な社会的環境と関わ
りを持ち、地域に根差した仕事を
いくつもしてきました。彼はただ
単に音楽の楽しい場を提供しよう
としているだけなのか、それとも
環境的次元（お年寄り、病気の子
供達、学校、特別支援施設など）
を考慮に入れるべきなのか？

彼が言うには、「何かを始めよ
うと思ったら、まず明確な意味が
なければなりません。音楽が行わ
れる環境は、したがって重要な要
因です。しかし、あくまでも芸術
性はそこなわずに行われるべきで
す。」シヨーンは、今置かれた状
態でどうしたら目的を達成でき
るのかを考え、常にアンテナを張っ
ています。それは絶え間なく続く
学びのプロセスで、たぐさんの役
割を包括しています。彼は言いま
す。

「役割はいくつあってもいいの
です。リーダーでも、ファシリテ

イターでも、作曲家でも、編曲家でも、伴奏者でも。その場でできることをすればいいのです。

役割を変えてもいいです。芸術というからには、実際に今やっている仕事の意義とその実践方法を常に捉えておくべきであると同時に、それが言葉だけの「アウトリーチ」とか「教育コミュニケーション」止まりにならないよう、意義を明確にする必要があります。すべてを簡単に箱の中に収めようとしてはだめなのです。

大切なことは、あなたがグループと共にいるという認識です。メンバーを励まし、彼らの考えを表現することができるようにすることです。

要するに、あなたが何かを別の何かに変えてあげること」なのです。スキルを持たない幼い子供達であっても、高度な訓練を受けたダンサーや西アフリカの音楽家であっても、それは可能です。新しい接点を研究し、新しい言語や可能性を発見するのです。

環境とのつながり

「新しい聴衆」を得る鍵は環境とつながることです。では、新しい環境とつながり、新しいタイプの聴衆を獲得するためには、何が必要なのでしょう？それが変容学習なのです。つまり、関係の枠組み（知識獲得の方法）を変化させて学ぶことです。

変容学習は、自身の立てた仮説や推測などを反省して、そこから新たに物事を理解するという考えを基本としています。メツイロウは2009年に、変容学習こそが社会活動を行ううえで有効な考え方を生み出すと述べています。

同じく2009年、ケーガンは変容学習とは「別の方法で知ること」とだと説明しました。芸術をツールとして聴衆の心と本当につながるためには、社会的背景を深く理解することが必要不可欠なのですが、変容学習こそ、知識の幅を広げ（別の方法で物事を理解し）、人生を賭けて学ぶということにつ

ながるのではないのでしょうか。

結論

芸術（音楽）の社会での役割は、その芸術を通して人の心の奥底に触れることです。音楽家は、決して偽物のセラピストなどではなく、彼ら自身のアイデンティティと意欲を持って、大いに社会貢献することができるとは思います。

これは、人々の置かれている多様な社会的背景を十分に理解し、それにしっかりと対応することで可能になります。社会的背景と向き合って、人々と共に何かを創り出すためには、音楽家自身が「別の方法で知る」ことが重要です。

そのような考え方で臨めば、必ず独自の芸術的足跡を残す、素晴らしい結果を生み出すことができます。とでしょう。

最後に

シユミルデ氏の講演を聴かれた方、あるいは今、私の講演報告を読まれた方は、きつこう思われる

でしょう。それは、彼女が指摘して「ポットフォリオ・キャリア」なる生き方は、すでに日本では多くの音楽家、とりわけ音楽大学を卒業した「音楽社会人」たちの生き方ではないのかと。実はその通りなのです。欧米ではこれまで音楽家の仕事は比較的恵まれていたのですが、リーマンショック後はとりわけ厳しい環境にさらされています。しかし日本では本来クラシック音楽の社会的あるいは宗教的基盤がありませんので、必然的に「ポットフォリオ・キャリア」を選択せざるをえなかったのでしょうか。

このように考えると、日本における音楽家のキャリアが今後は欧米でのモデルになるといふこともしれません。音楽家や研究者レベルでの国際的な交流がますます必要になっているように思われます。

〈注〉

本論は、当日通訳をされた大森ひろみ氏の翻訳原稿をもとに、久保田が要約したものです。